

話 題 (V)

S R / T I T

美しい環境を守り安全な生活を保障するための
小型原子炉のポテンシャルに関する国際専門家会議
International Specialists' Meeting on Potential of Small Nuclear
Reactors for Future Clean and Safe Energy Sources

－ 会議の概要と運営の裏話 －

(東京工業大学原子炉工学研究所) 小原 徹

標記国際会議が東京工業大学原子炉工学研究所の主催、日本原子力学会及日本原子力産業会議の後援で1991年10月23日より3日間、東京工業大学百年記念館で開催されました。

恐ろしいことに、大学助手1年目の私がこの会議の裏方の責任者をする事になりました。準備から開催までいろいろなことを経験しましたが、はじめにこの会議の概要を御紹介した後、準備運営にまつわるお話をしようと思います。なお会議の概要については日本原子力学会誌においても報告される予定です。

小型原子炉に関する国際会議は一昨年頃から世界各地で相次いで開催されるようになりました。国内では東工大原子炉工学研究所が主催した今回の国際会議が小型原子炉についての初めての国際会議となりました。

会議の参加者は、海外から17名、国内から102名で予定よりかなり多数の参加となりました。海外からの参加は、アメリカ、ドイツ、インド、インドネシア、ブラジル、中国、ハンガリー及び国際原子力機関 (IAEA) で、エネルギーと環境の問題に直面しつつある開発途上国からの積極的な参加が目立ちました。また、旧ソ連からの参加予定者がビザ発給手続きが間に合わず会議に参加できなかったのは残念でしたが、前の週にモスクワで開催された「小型炉に関する国際会議」に出席していた東工大原子炉研の関本教授によって講演予定だった論文が紹介され、今後のソビエトの原子力開発の動向を知ろうとする参加者の関心を集めました。

会議の詳細な内容については、プロシーディングが Elsevier 社から発売される予定なのでそちらに譲ることにして、会議のセッションと講演件数を御紹介いたします。

Session 1,4,11 : Small Reactors and Future Nuclear Energy Systems 10件

Session 2 : Small Reactor Deployment Plans	3件
Session 5 : Small Reactors for Developing Countries	2件
Session 3 : Water Cooled Small Reactors	4件
Session 6, 7 : Liquid Metal Cooled Small Reactors	10件
Session 8 : Gas Cooled Small Reactors	3件
Session 9 : Applications of Small Reactors	7件

また一般講演とは別に、“The Elements of Nuclear Reactor Theory”の著者である M. C. Edlund 教授、東海大学安成弘教授による Special Speech も行われ参加者の強い関心を集めました。

準備運営については、私自身に国際会議の経験がないうえ、大学職員になって日も浅かったため、今思うともう少しスマートにできるのになあと思う面が多々ありますが、当時は毎日のように発生する問題に対処するのが精いっぱいという感じでした。今回はその準備運営にまつわる話を3つほど御紹介したいと思います。

準備運営にまつわる話 1 準備期間

この会議は開催のほぼ1年前から準備が始められていましたが、私がこの仕事を受け持ったのは助手に採用された91年の4月からで会議までの時間は6カ月半でした。その時点では会議の名称、内容、会場、招待講演者の概略などが決まっていた程度で、First Announcement も送っていない状態だったと思います。普通国際会議の準備は開催の2、3年前より行われるものと人から聞かされて、本当に開催できるものかと、私自身かなり心配な日々を送りました。この年は7月に開催された炉物理連絡会の炉物理夏期セミナーの幹事もやっていたので、しばらく各方面への電話連絡と郵便物の発送作業に追われる日々が続きました。

私の助手になって最初の仕事はこの会議の First Announcement の作成と発送となりました。会議の日程が迫っていたので一刻も早く各方面に送付するため、印刷屋を通さずに DTP で原稿を作成し XEROX コピーするという超特急手作り First Announcement を作成しました。発送作業は、研究室の学生を酒で釣って人海戦術で行いました。数百通の航空便を突然持ち込まれた大学最寄りの大岡山駅前郵便局は一時窓口が麻痺しました。

会議の参加者のための宿泊ホテルの確保も頭を悩ました問題でした。外国人の対応が可能と思われる都内のめばしいホテルをあたって見たところどこも既に大口の予約

はとれないとのこと。それも会議日程の後半だけダメとのこと。いったいどうしてかと不思議に思いましたが、それはどうもモーターショーが原因らしいとわかりました。会議の直後から東京モーターショーが開催されるためどうも旅行代理店が都内のホテルをほとんど抑えてしまったようでした。とりあえず大学近くのマイナーなホテルを抑えておいて、宿泊者数がほぼ確定した時点でもう一度予約をいれることで何とか切り抜けましたが、かなり冷や汗ものでした。

とにかく万事日程が詰まっていた、会議参加の方々にも十分な対応ができていたのだろうか、ということを見ると今でも不安に思います。

準備運営にまつわる話 2 通信事情

海外との連絡でのダイヤル直通の FAX のありがたみは今回本当に実感しました。時差を気にする必要がなく、記録が残るので多数の方面と同時に連絡をとりながらの準備も混乱や手違いを起こす事なくできました。国際通信網の完成は意義が大きいと今更ながら思いましたが、一カ国だけ例外がありました。ソ連（今や旧ソ連ですが）との連絡です。とにかく電話も FAX もまず通じませんでした。時間帯を変えれば通じるのではないかといろいろな時刻に送信を繰り返しました。唯一比較的確実に連絡ができたのはテレックスでした。しかしそれも場合によっては送信後、該当するテレックスがないだの先方の機械が故障しているだのメッセージが KDD から帰ってくる有り様でした。

そのうえ東工大にはこの過去の遺物となりつつあるテレックスは一台しかなく、その場所は原子炉研から数百メートル離れた事務棟の4階でした。テレックスが届いた旨の電話があると出向いて受け取りに出かけ、また送信の際には原子炉研の事務で手続きをしたのちにやはり機械のあるところまで出向き、旧式のエディターを使って送信文を1字づつ打ち込まなければならないのでした。テレックスは事務の開いている夕方5時までしか使用できないので、5時近くになって急いで回答する必要のあるテレックスが入るとかなりあわてました。

ソ連とは、当方の会議と前の週にモスクワで開催される会議に互いの研究者を派遣し合うことで話がついていたのですが、結果的には当方の関本教授はモスクワの会議に出席できましたが、この通信事情の悪さとソ連側派遣研究者の決定の遅れ、日本側のビザ発給手続きの遅れなどでソ連側研究者は当方の会議に出席することができませんでした。事前の対応にいちばん苦勞した私としては非常に残念だったのですが、クーデターまで発生した当時のソ連の国内情勢を考えると、むしろそのような状況の中でも国際会議を開催しさらに研究者を海外へ派遣しようとするソ連側の姿勢を学ぶべ

きかもしれないと思いました。

準備運営にまつわる話 3 レセプション・バンケット

国際会議にはレセプションやバンケットのような歓迎行事はつきもの。普通は高級ホテルで豪華にやるものらしい。国際会議は会議そのものよりもレセプションなんかの方で印象が決まってしまうなあ、などとプレッシャーをかける人もいる。レセプション等については企画から運営まで私と原子炉研の助手会に全面的にまかされてしまったので相当悩んでしまった。

今回の会議は大学主催ということもあって、予算についてはいかにお金をかけないで国際会議を行うかということに挑戦しているのではないかと感じられる程でした。会議も使用料の安い学内施設の記念館でやることになっていました。当然レセプション等に割り当てられている予算もわずか。どうしようか。

結局レセプション・バンケットも記念館でやることになった。食べ物飲物は記念館のレストランにお願いした。しかし、変化に乏しいので何かアトラクションをしようということになった。ではどうせなら、大学であることを前面に打ち出して学部学生のサークルに依頼して何かやらしてもらえばいいのではないか。その方が大学を挙げて歓迎しているという雰囲気になるし、第一謝礼を払ったとしても安上がりでできそう。さっそく交渉。学生は原子炉研から食堂に行く途中にあるサークル棟にいる。

会場の都合と学生との交渉の結果、レセプションでは弓道部（弓道場も原子炉研のすぐ近くにある）による礼射（2メートル程離れた巻藁に矢を放つ儀式、矢を射る前に和服の肌脱ぎ動作などもあり日本風雰囲気十分）及びコーラス系サークルによる混成コーラス（全国大会2位の実力）、バンケットではジャズ系サークル（頼まれて外で度々演奏しているとのこと）によるジャズミニコンサートを行うことになった。アマチュアの学生であることを印象づけるため学生さんの代表には、自分の専攻している学科や学年さらに最近のサークル活動などについて紹介してもらった。

果たして思惑どうりうまく行くかかなり気をもんだが、結果は大成功といってもよかったと思う。大学にいても学生のサークル活動に直接ふれる機会は少ないので、今回彼らの演奏や演技に直接接し、理工系単科大学とはいえ彼らのサークル活動のレベルの高さを知ることができたのは思わぬ収穫であった。海外からの参加者からは今回の会議の印象について非常に at home であるという声が多かったが、これにはレセプション等の寄与が大きいのではないかと密かに自負しています。

以上準備運営のエピソードを三つ御紹介させていただきました。いかにもすべて一

人で準備したような書き方をしてしまいましたが、実際には原子炉研の助手会、技官会、事務官の方々の総力戦による準備運営でした。また学外の関係各方面の方々の深い御理解、御協力があってこそ会議は実現しました。改めて深く感謝申し上げます。この小さな国際会議が今後の原子力開発に何らかの意味を持つことを願ってやみません。

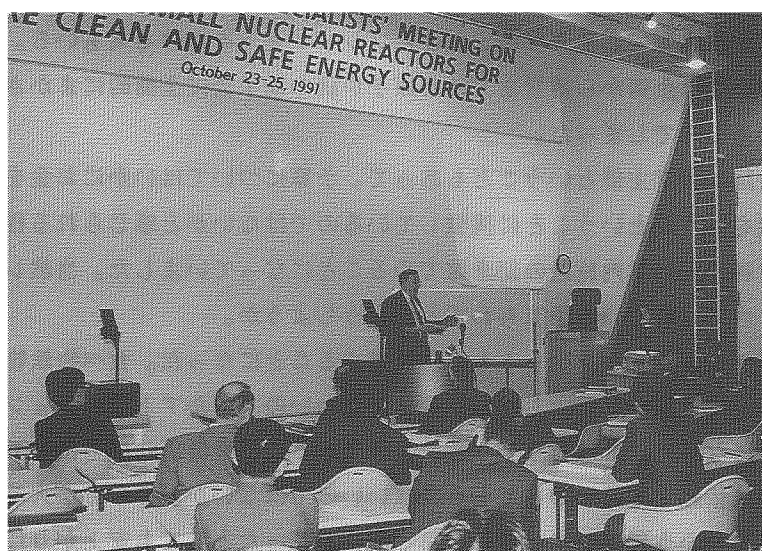


写真 1 Edlund 教授による special speech



写真 2 レセプションでの学生サークルによるコーラス